席上
奇観

垣根草

三

へ 13
3105
3

席上奇観垣根草三之巻

勒晴宗夫婦再生の縁をむすぶ事

いにしへ朝家のさかりなりし頃豊後ハ久しく大友家の領國として國司代とて重く取たる郡司と称す是なる國人の子勒の大領を宗とする者あり
わかきより学世して次男小次郎晴宗とて生れながら容貌よく
ことに幼きより詩文管絃の外書画の工みなる事鄙には類ひまれなるをさへ
ありしかバ父母もことに愛しけるが世にとりある日都に登りて國司の
館に宮仕しけるに父の大領身まかりし後継母のそのかみに出しけれど三男三
郎直宗なるものを家督とし兄弟こぞつて諍されども小次郎ハ國司の覚え他にことなれバ
たまたま年毎にかへりなれども在京のうち紀の何がしの娘初瀬
といふを娶り偕老のちぎりをむすびけるが父の墳墓へもまうで

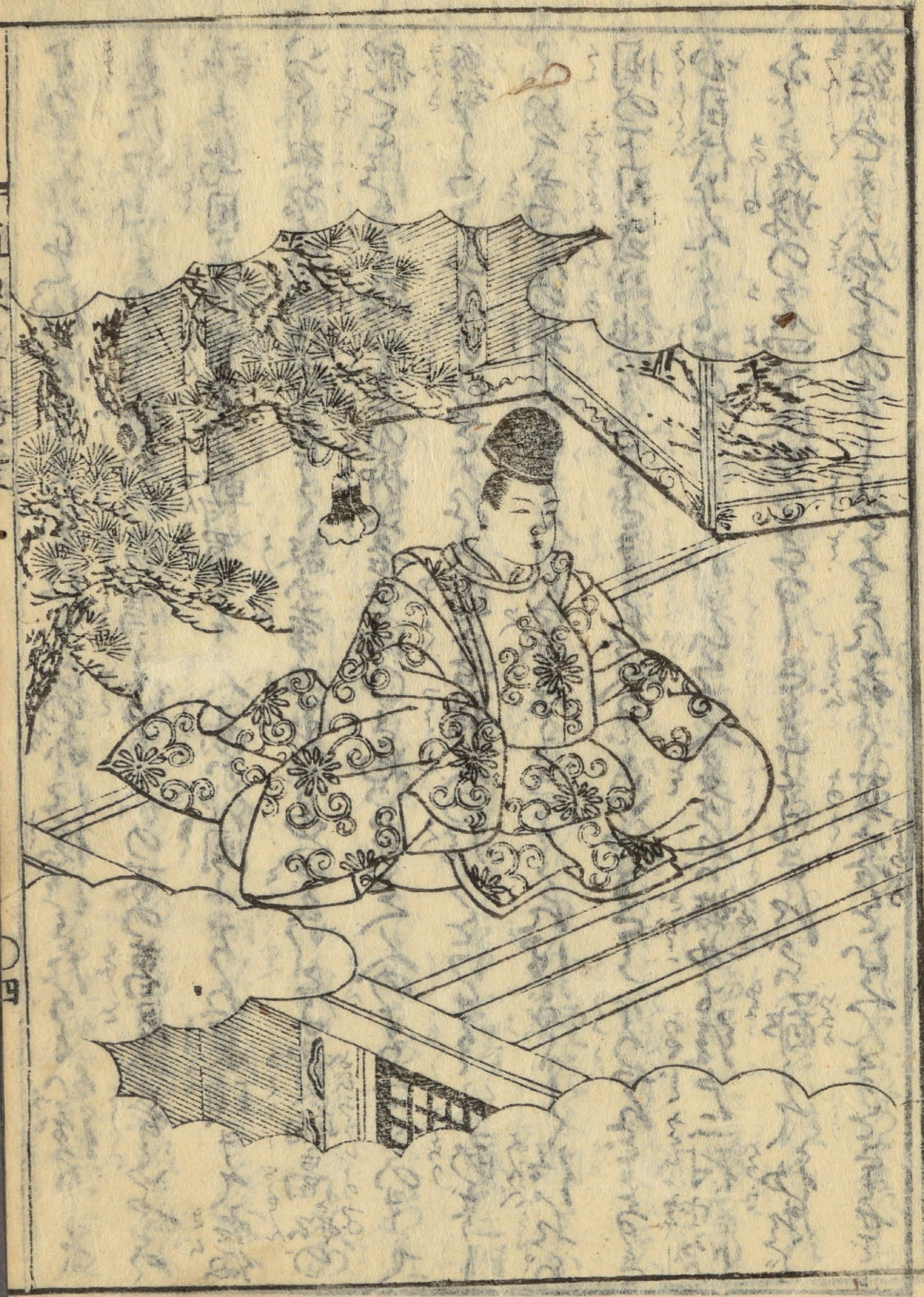
門 へ 13 3105 3
昭和九 七月二三日 購求

たくみし一族の者とも国司の恩顧のわざとはのおちきこえんゆへとく
ねらひたりて国司の甚りしやりるよ衣服あらんどの類かずくばかりて
きさらぎの頃妻をともなひ従者両三人を具して難波津より船をまよ
ひしくもりぞなき出ければ海上のなかばあまりもゆかざるにかしこしよりわ
うしのながれをもて一刻千金の妻をともなひ酒くみかはし吟詠なと
まし夜ふくるまでいねもやらで詠じ居たりし船の者どもはやいびきする
くらきほどにまぎれて其頃伊豫讃岐の間に海賊わ
まる積術て往来の客をなやませしか次郎かくともしる
不慮の便もなかりしに此よる海賊の寄来りて熟睡をとられ寛貴
の者及び次郎が船に上り器物調度の類己が船に移せし
てこの小舟とおしはなちてもとはすべて小次郎

国司の守がつかひをもて起おくりと有しをいで海上へ投入させ従者の輩と
討はたす事を皆海上にて水主ども畏まりて衣服を奪ひ
分捕て賊船へ運びて漕出せしか従者をかぶり注呼へとも
様なく海上の事なれば御したぐひ賊主しかくさしき調と
やうして此世の人をたのみなく仏るまでのわざなれば家業かの非義
ゆへなきにおよばぬ海賊にわたし嫡子あまたてもいまだ幼き妻を
むかへて下賤の女とめとりて仏ぐらし其海賊にかへりてせん姿
かくて身を寄しかたくはやりかくて重のかたとするにんの害を
そうちくし分の流眼なる妻のおとうとそのよしを告こそ厚
とらんとす頼むべき女とくはしく敵をとらへ怨を報ひま
らむと向ひて其をかくし瀬をかけて賊主甚しくはげしかりしか

をとゞめて船を岸によせけり己が家に帰る賊主妻とてもなく唯
乳母なる老婆一人のみにて甚貧しき海賊の者どもあつまり居る
のみ婦女の中に世に稀なる国の色にて羅綺の衣をまとひて白くして目
とぢたる賊主もそのけしきの外なるに安堵して家にかへり
千日余をすごして一人長の高船にてわかその夜人四国の
わたり向ひて出て賊主其夜の大小の海賊を率し四方
ね御被をまとひて老婆いひてまうさる一重の垣をとゞめて
ごとく下てもそこも都の外にて郷路をたゞ人もなく風乃
たるところなきに行所をもしらずさまよひてもなく
出しかへりさきに走り蘆葦生茂りて路もなく九二
三里もあゆみて人所に行き大海にいでぬ

なほしかんき重き鳥のごとくすなはち人家のあるにやとゆきて
夜もかのぐし明るに頃から織を手に出て高船とまうして一
艘にのぼりて行きてより船のりて袖をかへし
たる婦女の行来にまうしてかへりて入船にてものゝ世をたどり
て船主と手を開くるに艶なる女の姿をまもりて
もあはれなりてうちとけて交の間色にて媚ある船主織
にかゝりて抱きて湯茶をあたへて息をかへさせ
たるかの気をとりもどし人心ちつき
さめてありて茶をあたへ呼吸もたしかに衛りして
ておそも夜を息つかへりて一同をあつめてこゝに
船の紀業の人商にて諸国を廻りて婦女をもて転買する船



なりとて此彼湊ところのほかにはひの外に徳をたちて人続なりして
急に私とよびて蔡列の嶽鳩に従ひてかの下の葛尾の岸にいたりその
許より島国三禄貫文に輔貫して人商人他国よりの其頃まで在往
いつくのかくは海路のせつく繁華の所の人家かくつよく貫船商船の
船とまり路の上の御客と呼びまねきてさ人のよろこびの事して
繁昌しけるにそれより旅やどりの遊客旅人の伴人をひきてまた数そう
してかの葛尾の岸もここえていつか家居もきかさるれはさらしく作れが
国の下司或は従者のすゞきまでも人をおいてまさしくなりけれど又まで
主司代なんども打ちよりてかけあふ人多くれが妓女も後に二村
など名妓の名を方にかゝるすゞさまでもさればこの郷にて彼所
繁昌なるものす其上に其客をむかへんまでとてせる

彼湊人商の船にあつまりて毒蛇の口をのがれて虎狼の害にあふ
のみならずとのくつにいたるまでものを求められ…
まことや王昭君が胡地に嫁し漢宮萬里の門前陽楊貴妃が驪山の
舊宮を後にして梨花一枝春帯雨といへるもかくやと思はるゝ哀さ誠に
呉の国色悩る西施が虞氏をまよはす玉をも後に煙花に馴れしか
妓女とてもみなこれ多くの妓女の中にも名を得てる後に二村
千く居りのくかく…君の世をかけて許さるべくもあらず…
げを親とたのみてはかなき身を門外の流れに出して或は客のことく人お
き人よ…て売られて貴族さまたげも侍り朝夕に列…
やうすもなく侍りて寄る人もなくてまぐれ侍るもの…侍りけるを
かゝる彼の枕にねむる湊もなきによるべなき…遂に…

たのもしげなき世をもすごさんとそれを頼にするくらゐにてさげれる
たのしみも侍らずそれよりこそまされ巧みすぐにむまごとは萬てより栄
きその遊女も詞は今も昔も里の長をも同じふみもならずなり
まよはずそでのべさかへて纔戸が孫やよつてもら 萬ぬその夜人あつまり
て後纔戸また宿をむすぶて操を守りたまはず此より萬まゐらせ国
へまゐらせこれかくこゝめとうんするで今の世を無縁へも此萬事比
里の遊女ちるげ白拍子といふもあまたに客をもつゝ侍るも侍らん唯
ことしの風流は酒宴の興を添まで高貴の家に召れて月前の
を操のそくて操をさくれるも侍らん君に近く都へくだされが其
あんに塩俗そやゝあまそそのこゝろをだましんなすれ里の
かぐさめまのあり身もやまくかくもなくするべしとぞきこえし

さて中ころ初瀬の何がし伊賀守命をすてゝもやがて今の世の
仇を報ぜんと思ひたまひし其身を高貴の家にせはしくこれを
いはゞまことに源氏纔戸に向ひまのをくりてなはむらへ
あれこれかくかへ纔戸よりまことに此里の長より
皆に計りてしらせ歌舞吹弾をたしなみにそこより
糸竹の道に名を得て里の名をあらはれ神楽が今
頃にいへども信るとそれぞれ頃ても藤原朝臣道信
卿新に国府へ下りてあふに近年朝家の繁に海賊追捕も窓
にあつかひと世盗の海賊とぞく捕るの海路の風波を静めよとの別
勅を蒙りて西国南海の此施行たる人は諸国の其使なる間
く国府の舞楽伴舞にまゐりて一日国司誕辰の慶賀にて白拍子を

めでられし初瀬は其数にもあらざりしを去年より国司基近好色を愛
しられ数日とゞめ給ひしが或夜月のあかりし南の殿にをはしたるに
初瀬は琵琶をたづさへて侍りしが初瀬床にむかひて指の紅絃
ゆるくしらべて涙をうかべ人しれず沈みたりしが軈て流るゝ玉の
四の緒かきならし一曲を弾ずるに大絃小絃嘈々切々として雨のごとく
語るがごとく暁の鶴の夜の猿の腸を断るもしをれ泣がごとく訴がごとく
餘韻嫋々として細谷川の流をあらはしたるに国司も人々も袂衣
の袖をしぼりけるに海が中限なき愁あれば何にて流離哀怨の聲
宛然として明らかなり国司も涙を催し言下に初瀬をよびて樋をまゐ
らせ給ひて絶入しが初めて流を越へて身の上の物がたりに
こゝにて琵琶にて国司兄弟も名を聞てまた手をつくし秘藏し

たる此は去年の事なり海賊の難にあひし時主人討たれ我は海賊の手に
入しが君の御詫に依りいかにせんと悩みかゝる処に国司は是を憐み
晴宗公も家来おのれが家来にもまぎれ入て此国に来りて
二郎の安堵をなし給ひてかゝる様難の話を感ずる
あまりあらず其力を助けんとて妾これ海賊を探ること宗光やう
賊の人綱を漏さじとも賊が住居の国の境に入りたるやと宗
に初瀬にも此国に来りて国司の名をたよりに唯我の面影を
とゞめて国司の琵琶を探れば
賊の隠家を知りて頼みて初瀬が身の上をあかして此の方の
詫によりて彼兄弟の琵琶は国人里に庄司あるのみなりける
あきらかに知れて身に先年預られ大三郎公の手に渡りし

なりて海珠寺といへる禅院に寄宿しける時寺僧の中にあるものとかたらひ
僧の縁をもつてその寺より其来歴を尋ね侍りし聞し国司の下知
一般の僧越香せんの折にて当所の者ともあつまりしといふにぞその賊主が蹤跡を
影宵と云ひし強ちの諸国へ追捕のことを乞はれて促しなんと今宵よる
四国の賊の藪浮しさることなれば追捕の密使まゐりて補ぎの国司初
瀬とかふる小笠原ぞかくしまして窺せさせ侍りて其者よりかのほらふさる所を摘
賊主を偏しなりて川の上の主家を探り求むるがくくる影迹もなし翌る春
大阪の時にて防州の商船に海賊のまさに乱入けりしを折から追捕使の船ち
かくれからなる此動静を聞より取囲みて一人も残らず生捕て国府にゐて
みつがるのごとく初瀬が窺ひしむらにかさりて賊主なりと言ふ者の張本
おしすゑて一々盤詰するに七条坊門京家の武士の船を統ぶるよし

まで罪を白状に及びしが国司聞きて自ら廳に出でなほも初瀬をよびて賊主この
婦をとらへし事を尋ねしに賊主大いに驚きて面をふせし国司笑つて云ふ道昭
照が念じてむかしの婦人纔に五十年余の今に達することをとりさはぎしも
公の罪人なりされば初瀬の為には色ありて[illegible]にさりて後初瀬が
なべてまた其首と小次郎が霊位に供へて千年万古の報讐のこころ
さしなくて居ることを生ける人よりもよろこびて厳かに千載の恨みて
に[illegible]し万端の難忽ちにとけたりと見聞の人涙をながさぬはなし
其後初瀬にとやかくそのまことをもて後者の追薦のみ水陸を修したり
其費は皆国司より賜へりけるに初瀬恩恵の海山なるを謝し徳此上なし
師とも頼みし弟にて亡夫の菩提を弔ひなんとせしに国司も
その志の切なるを感じてその後も折しも北の方御産の臨月にあたりしが

宮仕へしまゐらせて後産のまへなるべしと其の方よりもとでをそへてしまひぬ
とやかくして母子もろ共に居たる其須国司別殿と云ひしたまひ画工を
求めて子を須肥後よりきたる住吉野主馬と云ふを進むるのありて
一鳴とかくしめるに画法正しく礼額みれあるに[illegible]其子弟を
身のうちに肥後の名を言ふさまでも言ふの節めぐらんおもしく
なりし其方の貴師家傳の手と安語もとむるに主馬謹するとしわくらを
らん豊後の在にて国司となりて都にまかりなまく国にかへらんとしたく
海賊の難にあひ妻なる者もむなしくなり幼き水縁の御ともなうく
あらなりにかくとき命を保ちく高松になみにもとの国にかへる継母の其より
都の栄華に身を失ひ零落したるもとわらる罪を数く一族ともに
又限りてよるべなく頼みしか京都の国司の館にいたずらく寄寓したまひ

他家より家を継たまひて卿に積む木の下露となりて死ざるはなしさすへわ
つるに肥後より此の赤縁侍りて其母とおなじ情ありし命ながらへ一端と[illegible]
名をとどむれども又なりしの墳墓とも帰らく其後は出家したまひ[illegible]る者
の菩提をも弔ひ給ふべく[illegible]の縁のこれ都にのぼるべき女
しく楢と添たると今の煙の下にすだける侍るのうちに何の師傳と鳴呼
ずきしきこそ[illegible]も侍る[illegible]と添よくまで善人の国司はなく
さんの子姓名の妻なるたまでも面ざしめでたき眼宗なりと云ひし[illegible]
裂帛の琵琶と云ひて是なんそれおのやしき子主馬ひとりしとも[illegible]
まで[illegible]住みし秘なりし裂帛とかれたりてしかくあそん侍るとても
国司なりし晴[illegible]に手と主節[illegible]もつぎて海妻子とぞもなく世にたのむ
身をまかせて[illegible]の賊難をもとめんや主馬ある体して太馬の首[illegible]

又国司は猶かく云事を聞ま一婦あり出身はいやしかりし者なれども治めとして
貞烈女としてめわちんいいん主馬が尊命の重きに至りて去る理あり其此
一筆の誓心安からずる身の亡妻罪あるにして賊の為に死し余生を偷みて今に
至りても身の立ざることおそくしれ追慕をもいよますべ幽魂さこそみんて
薄情を恨んとはせ始めところあまりして再離の念あるを信ずるもの衆く
鄙情を察し多くと実情とのぶれは国司ますます嗟嘆したまひ婚姻の約
承りたべし今よりは雖下にわたりて安穏なるべしと主馬恩を謝して
退きぬやがて此の事四方に広まりて上下其妙をのぶるに
国司より酒賜りて終日喜酒を酌みて夜に入りて興闌なる時国司主馬と
初瀬を呼びて此夫婦に延りて世上再生の縁をむすばしむ是に鬼魅とや
いかなることなりきを永に返魂の術ありと今さら申ぐりして初瀬を召せし

時にふかくしも初瀬は明日として海が剃度とやらんべき事を今やかくこそ世
乃名の名残にて侍女にもそで衣服とりはからはせよろしべきにあらずとて
さもなくばするかさて上下盛飾濃粧の風流ととりしく誠に天津乙女の
月の都を出でしかとうたがふる侍女はすてて国司の傍に座すると、いふ所に上臈より
んと面をあげよくくよまぜば妻乃初瀬なりしかの小次郎なるにやか
にて妻が現はし涙にむせびて覇王は人々の袂も絞る程にもすれて覚えず
夏の比ほどりにて互に涙のそこそんて国司座よりむかひて初瀬が貞操
なる又晴宗が此の妻が又誠の心ありとてかかる一座皆感称して国司の仁
恵をまつり国司盃をとりて初瀬にたまひ汝今生れ離れたるものと今より
かくて弥て其の縁をむすび初瀬の名を改めて瀧川と改めて是も夫婦の
逢ふる月の盃と晴宗にあたへし晴宗は夫妻の姓名を藤にて華して下司

の隅なるあばら家に住居し後刻繼母の讒言もかくつゝみさへしられざりき
ねたく私意を弄び繼母の為に哀怨の生ず事少からず爾より名をば
て秘密をいへば武家の意をはくかたへ婚姻を助んとて繼母に命じ与へ
白銀百兩いろくの不祥千萬とりて出せり其姉の夫大とりし此地に新しく
其恩恵乃両人なりとそれは誰にも長く國司に仕へて恩顧ますます他々
こちらで國守一族もこの儘に置繼母のこゝろにありて其のやく
親しく宮ぞ讒言によりの離合を其數ありて其縁尽きず胡越も
そかんにして久しからぬ類にてたんとするは之に倣ふ

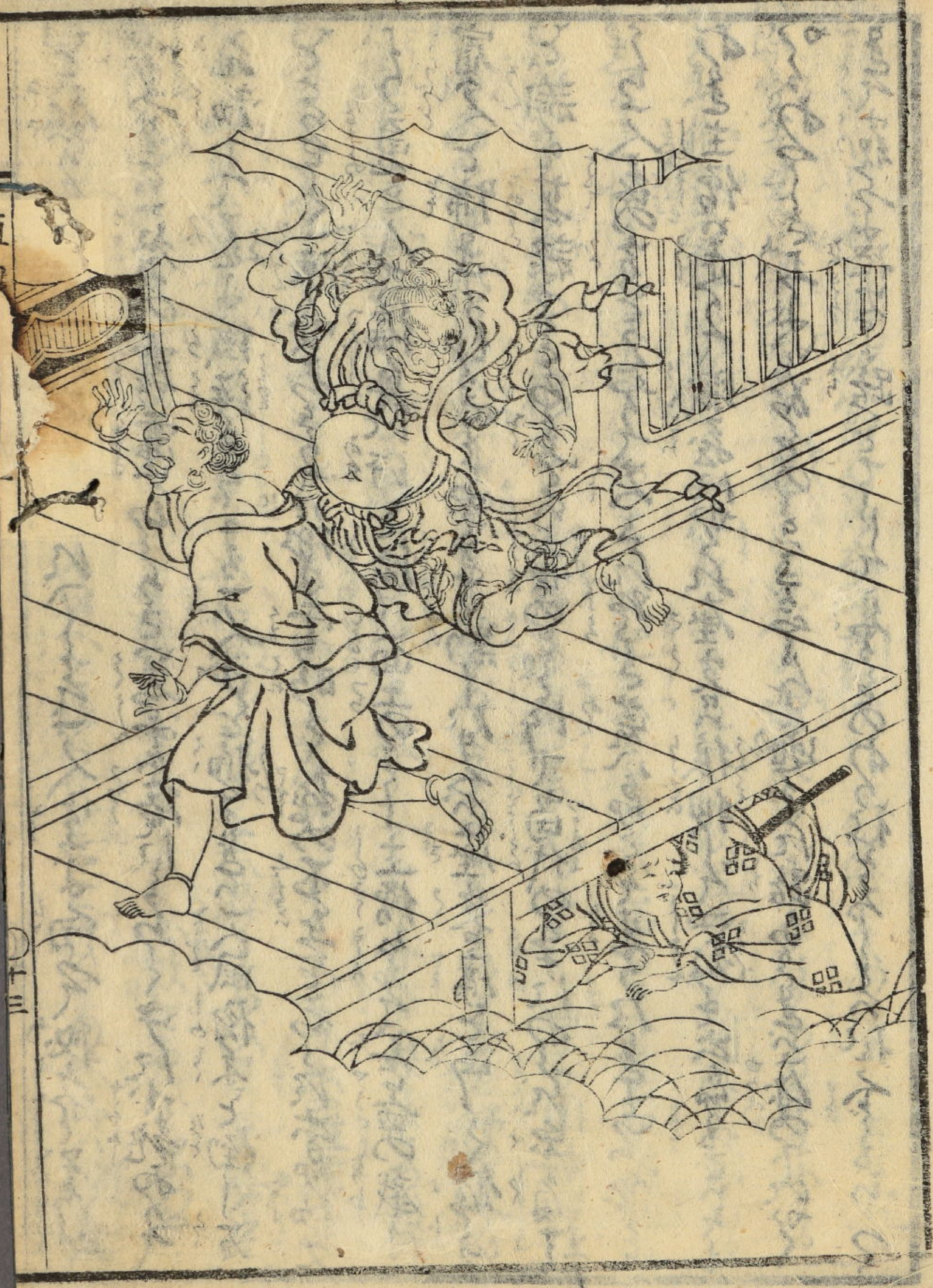
宇野六郎座主の旌に逢ひ

貞治應安の頃室町家は細川頼之義満将軍を輔佐して天下を統く
征しませんや南方の兵衰尤多の勢ひ楠木氏も兵機を失ひたる力

たりしぞ楠子四天王の名と云新田の一族も北越の雪と共に消え四国後乃
春を迎へて国中漸く静に足利の武威大いに振ひ海内一統しけるが
千戈を枕とせし宇野六郎俊勝岡部八郎資忠とて二人の才子あり
父祖は北條家の功臣なりしが元弘赤坂の後は世をさけて三隅のやまかげに
居つゝ都に登りて身をよせ一族と共に弓馬の道を学びしに生れて馬を好む
入りて家をとりて水魚の交り浅からずといへども二人の志操大いに異なり
六郎は生質聡明にして文学を好み風月を友とし八郎は生得血気強く勝
まくして平日猟を好み武事を専らとし外は柔にして世の人荒八郎と
呼び六郎常に八郎が匹夫の勇を嫌ひ文学を専らとすすむれども八郎又
武門に生まれて柔弱にて勝れたる事と譏りて其趣をこととした
しこたびかかる事しに六郎或日数馬の馬に乗りて出けるが

秋の日のならひとて程なく暮るる時雨に路をわかねど外に見と曇し
て従者とても具せざれば唯一人北山をたどるに雷雨殺しく咫尺を
見へわかねば轄しく路の辺の辻堂を見つけて軒にたたずみて時間をぬ
すみ思ふ所にかりに燈かすかに人のけはひのするにそこへ行ひすまし居たるか
また人は住ておらかく人家をもとめて下手に庵を結居てつれづれを慰め
すまし侍らんと思ひしに程なく草庵を設け寺のいきほひもさも衣くおびただしく
るに主の僧ハ円頓の宗にて念仏ねんじて居たり六郎を
みて常住の田畠で信衆もちらまかせてようれ檀越の庵をいまたす
まづもおきまして草庵にまゐる宿へ入りておのれ六郎にも
爐をもて居りて木の実をたべて昔に世の因縁をも語りて主僧
黒く稚きとこもて出たる六部数粒を食して味ひまた世の常なりし

あつまく主人の首するに主僧云来れ今宵ハ此所に宿りあかせと
いそ山林の隠士岩下の道人などに集りて小話をも秀才も上席に列りて
塵腸とおもひなまじひに六郎も交りて待居るに程なく入来る一人
其長七尺有余にして僧とも俗とも分ちがたく髪鬚も乱れ生ひ茂り両
眼皆ただれて霜の眉垂るるをかかげて座につくあり或は衣の裾まくりたるに
肩をあらはし頭にかづき耳もなく面もなきもあり鉢の子をささげ
たるあり又ハ頭を布やうのものにてつつみて身ハ襤褸をまとひ形枯木の
ごとく面は皺みて眼ハ日月のごとくなるもありて異相の者五六人ありて主僧に
礼をなして座につく六郎ハ大におどろき竟身に汗を流して肝をつぶしながら
末座にありて居る主僧云今宵ハ秀才の来りあはせ給ひしかバ
各位とおのおのこれに交り座客のなかに詰めて六郎と額を合せて云秀才



を慰めんためん薄術を呈れべしとて一人空に向て秘文を唱へしく
唱ふるに一聲の霹靂おどろしく黒雲座にふらく中に小龍あらはれて
飛動して遂に鐵條をできる一人を抱きあげて風雨を起して一尾
となりて一陣吹きたちて像は雲暗く龍の面をあらはし六郎初めん
より客鬼とんで偏身に汗を流し面土のごとし主僧なりて無益の戯れ
賓人を悩ますことなかれと制しなば座客席と再びく餘ぶの
と論じて甚だ諸ころもくの上世のことにて當代の事にあらん兔角すら
こら一人客の方をうんやりてみれば荒八郎さて其所を不りそとこそ
あまた主僧は走りて眠藏にかくれ座客は狼狽して四散す六郎もこれをも
かるあつしさ上すよいかとのさまでやらんと逃れ路あらず床の下にかく
まれて窮して把出すに路をうりて其所のありさまをかしとれたるをするちらぐ

とらくしらまで胴中を八郎なる六郎荒縄たるに仏像しておらはすと叫くたら
八郎めなをも其の身の冷をの座をとつてつかみあげ迎へにかんさうなりあるか床下のある
すくみ狐狸の類の族とおもひてしるは妖怪する人間に荒僧ある
をとりて協りてこれを手とおもとて把出てもとりて席をとて見よ黒石に推ど
をつたるしろうて彼をとて鐵條よて氣を喜くんぞく備ち園(?)碑は後
席に壇上のくびきたるはその身よやりし眠藏をそれを見よとおりまに古佛の支分
欠損したる一躰たんとおもひなる主僧もつて一とれをもつての前が
とのことそいかはりきこそくまで主毎にありて座の下かりにて六羅漢二王
かずの或は片身わられてまた足もかく損じたるが五六躰ありあり乃必定
妖怪の此とのたの業ならべしおそ千載の人をすぶらしとる数を知らずして
あらたにくびし八郎一所に束縛して火をたいてこれを焚きけれ六郎の神れ

いまだ定まらず八郎云足下半日の文字を解け万巻の書今用ゆるに
いんき氣塞に飽るほかなしと笑ふ六郎重ねて云一夜已に明たるが
かんりんとするは六郎云かゝる古物を存すること近世不一大伽藍の旧
跡なるべし断碑の類にても埋もれんもはかりがたしいざや採んとて八郎
ともに四面をもとむるに西南の叢の中に大なる石纔に一尺出たるを払
ひくらくとするに云碑石なりと嬉しく読んとするに文字は剥落し
て纔に数十字を存す水をそゝぎ苔をからげて其大略をと
る又八郎に向ひて足下試みに是を読で寺の来歴を知らむ
べしといふに八郎云華玄の類まだあくがまゝにせずや足下に
まづ乞て六郎碑文を読て畢て云寺は荘厳寺と名づく
本願上人は智證大師檀越は藤原関雄碑文菅原清岡作なり

関雄は内麻呂の孫真夏の息にて世に東山進士と称する人なり清岡
は善主の叔父にて当時の宿儒なり寺のふるきを考ふべし六百年余の
古物なれば筆ひたれまして残簡断碑をも世々名儒の大に珍重
ず賞せざらんや今時杜撰の者どもみだりに名を貪りて金石を雕て醜を
あらはし愚を売る類と比せば玉と瓦とのたとひもおろかなりと限りなく
よろこぶに八郎妬には素より武名に依し雖ひ足下の文才に嫉むこと久しく
は六郎云古佛は足下の毒手に死し旧碑は素が愛寿に生るあの幸
不幸はいかばかりぞや静なることも甚しく辱しめてともに並びたる旧碑の
徳あることはまさに帰らんと起程る六郎は細川頼之推挙して
義満公の師範となりて文名世にかくれなく八郎は明徳の乱に戦功
ありて数ヶ所を宛行はれ後に鎌倉にくだりて上杉殿道の頃

まで存命して両人の忠戦よ家名をおこして子孫東國に至
なりしとぞ

席上奇観垣根草三之巻終